

仲間 の 輪

ぐんと身近になった蘭の深い世界を
愛でる、育てる、学んで楽しむ

みやぎ洋蘭友の会



蘭の話になると和気藹々。教えたり教えられたりしながら楽しみを深めている

第43回洋蘭展示会が2018年12月、多賀城市山王にある田口洋蘭園で開催された。主催はみやぎ洋蘭友の会。会員が愛情をもって育てた蘭を展示している。

同会には、洋蘭の栽培とコレクションを趣味とする仲間が集まる。昭和50年に、洋蘭園のオーナー田口俊男さんと現在の顧問を務める泉信夫さんが立ち上げた。「蘭って難しそうに思えますが、条件さえ守ってあげたら誰でも育てられるんですよ」と泉さん。泉さんはパフィオペディアムという品種の大家。昔、花屋でデンドロビウムを見て、いいな、と思ったのが蘭を好きになっただけだったとか。6代目の会長 太田美幸さんも「あれこれ手をかけない方がうまくいきます。水やりも毎日なんてかえってダメ。むしろ不精な人向きかもしれませんね」と笑う。蘭というと高級なイメージ、手が出せないイメージだったが、テレビなどのメディアの影響と育てやすい品種が流通したことで、一気に手がとどく花になったのだそう。この洋蘭展示会も多くファンが毎年楽しみに訪れる。

「主人が買ってきたシンビジウムが咲かなくて、いろいろ調べてみたけどわからなくて、この会を見つけて入ったんです」と話すのは後藤けい子さん。ここで知った蘭の世界に夢中になって26年。温室見学や旅



展示会では、会員が順番に受付など会場係を務める。くじ引きプレゼントも用意されている



「蘭の話を始めると楽しくて仕方ありません」



色鮮やかな大輪の花には心奪われる。「絵を描く人や、陶芸をする人と同じような気持ちで花を咲かせているのだと思うですよ」と太田さん



綺麗に咲いた蘭をみながら見ているだけでとても楽しいという



泉さんと自慢のパフィオペディアム。蘭栽培先進国のドイツに、毎年研修に行っているとのこと



会長の太田さん。宮城県知事賞を受賞した自身の作品の前で



洋蘭のファンが毎年楽しみに訪れる展示会



受賞した蘭。普段の月例会でもその時に咲いた蘭を持ち寄って人気投票を行うが、今回は年に一度の展示会、この時期に合わせて美しく咲かせるために心を配っているそうだ

行もこの会での楽しみになった。もともと園芸好きの大久保昭子さんは、大事に育てたはずの蘭の蕾がクリスマス前にいっぺんに落ちて大ショック。そのときに見つけたのがこの会の電話番号だったとか。入会から10年あまり、温室は持たずマンションでの栽培だが、出展するようになってから何度も賞を取っているそうだ。9月に入会したばかりの今中 剛さんのきっかけは、いただいた胡蝶蘭。「栽培の仕方など調べても独学では限界がくるんです。個人個人のやり方や経験を聞いて学べて、本当に楽しい」。立ち上げ当初は6、7人だった会員も、蘭人気で愛好者が増え、現在は45人。月例会では栽培方法などについての勉強会や、会員の温室訪問など盛りだくさんの行事を行っている。大事に育てた蘭は「とうほく蘭展」や、東京ドームで開かれる「世界らん展」へ出展、毎年のように入賞者が出るほどだ。年に何回か初心者向けの勉強会を開催するなど、誰もが参加しやすい会の運営を心がけている。会員の年齢は30代から80代と幅広く、仙台を中心に登米や白石から参加する方もいるという。

「蘭という特別感のある花をたくさん咲かせて遊ぶのは、とても贅沢な趣味だと思います。出展してみなさんに見ていただく喜びもたまらない」と太田会長。鉢植えを育てるのに行き詰ってしまった方も、もっとレベルアップしてより美しい蘭を咲かせたい方も、より大きな楽しみに出会える場になるはずだ。

取材・文／吉田田香 撮影／鈴木江美



上右／色鮮やかなカトリアは中南米原産 上左／ユニークな形の蘭はシルホペタラム。シルホ(Cirrus)は「巻きひげ」という意味。仲間には、ギリシャ神話の「メデューサ」の名が付いているものもある 下右／シンビジウムやデンドロビウム。こちらは東南アジアに自生していた花を品種改良したものが多く育てられている 下左／熱帯が原産の蘭だが、夏は直射日光を避け、冬はリビングに置くなど、人にとって快適な温度にするだけでいいのだとか

月例会／第4日曜日13:30～
会場／田口洋蘭園
(多賀城市山王字山王三区90-1)
年会費(4月1日～翌年3月31日)／
6000円 家族会員2500円
※入会希望の方は例会当日会場においでください。
問い合わせ／
太田：080-7718-2279
E-Mail: mytomokai@jcom.home.ne.jp
樋口：090-7070-4595
E-Mail: jhon5150jp@yahoo.co.jp
田口洋蘭園：022-368-3667